

3月11日に東日本を襲った未曾有の大災害（大地震、巨大津波、原発事故、終わることのない余震）に晒され、如何に現代文明・科学の力が脆く、安全神話が崩れ去るのを眼前にして人々の心に不可測な不安感が宿った。

あらゆる産業、分野に災害の影響が拡がり、私達の芸術文化関連も例外ではなく、突然、仕事が無くなるという経験は記憶にない。事務所と関連の仕事でも公演キャンセルを余儀なくされ、招聘事業では公演団が訪日を中止し多大な経済的損失に喘ぐことになるなど、サドンデスのエピソードばかり。

賑やかだった首都、東京・銀座、新宿も街の灯が落ち人影すらない異様な光景も続いた。困窮の中にある被災地と違い、直接的な被害を受けていない私達はテレビ等の報道で、別世界の風景を眺めているに過ぎなく、現地での寒さ、吹きすさぶ風塵、暗闇、破壊がもたらす異臭、見えざる放射能の不安、住み慣れた故郷・愛する者から引き裂かれた喪失感など、想像を絶する現実に無力感さえ覚えていた矢先。

福島市の小学校から「子供たちに音楽を聴かせたい！」との連絡が入り半ば驚きと嬉を感じ、逆に励まれました。聞けば校庭も使用出来ずにいるとのこと、今は6月の「フルーツ(紀谷恭行)とピアノ(泉翔子)」コンサートでの出合いを楽しみにしている。

震災後にはヒューマンな動きも見られた。人と人との結びつき、人を想う気持ち、競争から共存の意識。浪費・消費こそが経済成長の証としたことから節約、節制へ過剰なエネルギーの消費から、嘗ての日本にあった循環型のライフサイクルへの移行。

原発産業に集約される効率優先の社会が、明るい未来を指し示すことではなく、“鉄腕アトム”さえ悩むほどの破滅的な世界であったことを教訓・警告と受け止め、新しい文明世界をイメージすれば次世代への希望の火が灯る。

子供達や社会的弱者である人たちにとって文化・芸能が生存に必要なものであることを認識して、長期に渡る災害復興に“私達に何が出来るか”の問いかけを持続的に持ち続けていきたい。

新聞記事で共感したエピソードの抜粋を下記に付します。

《避難所の春風》

象徴派詩人の西条八十は関東大震災の日の夜、上野の山で夜明かしをした。眼下に広がる市街は一面火の海、避難してきた人々も夜がふけるとともに疲労と不安、飢えで口もきかなくなった▲すると近くの少年がポケットからハーモニカを出した。詩人は驚いて吹くのを止めようとする。この悲痛な夜半にそんなことをすれば、周囲が怒り、殴られかねないと思ったからだ。だが止める間もなく、曲が奏でられた。▲危惧は外れた。初めは黙って化石のように聞いていた人々は曲がほがらかになると「ささやきの声が起こった。緊張が和んだように、ある者は欠伸びをし、手足を伸ばし、ある者は身体の塵を払ったり、歩き回ったりした」荒冬の野に吹いた春風だったと詩人は回想する。